

2020.8.8

紙つぶて

戦後七十五年。戦争経験者が減少し、戦争への忌避感が薄らいでいくのを見るのは大変心配だ。人間として生きる以上、権力を蹂躪しごされれば怒りも感じるし、自己防衛するし、「どう見ても間違っている」と思う相手のことは力づくでも変えたい、と思う気持ちは理解できる。

しかし、一人一人には、どういふ立場で生まれたか、ということも含めて、その人にしかわからない事情がある。そしてそれぞれにとっての「正しさ」は異なる。それぞれの「正しさ」「べき」を押し付け合うと、対立は激化し、戦争に至る。

それぞれに異なる同士が地球上で共存していくためには、それぞれに事情があると認識し合うと

心の平和と世界平和

水島 広子

いふ心の作業が必要だ。相手の方が正しいと認める、という意味ではない。それぞれの「正しさ」は違つといふ認識を持つといふことだ。「敵」と認定してしまうと、人間はほとんど疑心暗鬼になり、本来の人としての温かさから離れてしまう。

自分が責任を持てるのは、自分の心の姿勢だけだ。自分とは異なる他者について、「その人なりの事情があるのだらう」と考えること、攻撃的になつてはいる相手は実は恐怖に駆られているのだらう、といふ認識を持つことで得られる一人一人の心の平和が、世界平和につながると思つている。

「戦争をすべきではない」「戦争をすべきではない」といふ自分の決意こそが必要だ。

(精神科医)